写真de俳句　入選作品　3

「写真de俳句」のすすめ　4

〈天〉入選作品　6

第26回　小雨の銀座通り　6
第27回　凍てつく大河　8
第28回　アルパカの後ろ姿　10
第29回　オオイヌノフグリと小さなアブ　12
第30回　常念道祖神の桜　14
第31回　恩田川のカワセミ　16
第32回　レストランのハヤシライス　18
第33回　漂うミズクラゲ　20
第34回　ホーチミンの市場　22
第35回　彼岸花の小道　24
第36回　廃遊園地　26
第37回　ウォーキング中に　28

〈地〉入選作品　30

〈人〉入選作品　91

おウチde俳句大賞　受賞作品　179

第1回　2019年　180
第2回　2020年　182
第3回　2021年　184
第4回　2022年　186
第5回　2023年　188

本書は、WEBサイト「おウチde俳句くらぶ」（https://ouchidehaiku.com）連載「第26～37回 写真de俳句」選句欄（選者：夏井いつき）にて選ばれた、上位「天」「地」「人」入選作品と選評を収録しています。（2023年1月～2023年12月までの掲載分）

抽出の季語は、選評の内容に沿っておりますので、歳時記に掲載されていないものもあります。

写真de俳句

入選作品

「写真de俳句」のすすめ

「写真de俳句」は写真を兼題としております。「おウチde俳句くらぶ」という観点において、写真を発想の踏み切り板として使うことは大変有効です。写真を糸口として、これまでの人生の様々な記憶を引き出すことができるからです。

写真を兼題とする場合、次のような切り口が考えられます。

A　写真と全く同じ光景を詠む。
　――写真を見ていない人の脳内に、写真の光景を再生させる。

B　切り取られた写真の外を想像する。
　――どんな光景がひろがってくるのか。どんな人がいるのか。どんなモノがあるのか。

C　写真の光景の時間軸を動かしてみる。
　――夜になればどうなるか。朝になればどうなるか、等

D　自分が写真の中にいたら、どんな行動をとるだろう。

初めて写真で俳句を作るみなさんは、次の方法から始めてください。

1　写真の中にある言葉や連想した言葉を、できるだけ沢山書きとめる。
2　採取した単語を、季語と季語ではないものにグループ分けする。
3　季語ではないグループの単語を一つ選んで、十二音の**【俳句のタネ】**を作る。

○○○○○　＋　季語とは関係のない十二音**【俳句のタネ】**

季語とは関係のない十二音**【俳句のタネ】**　＋　○○○○○

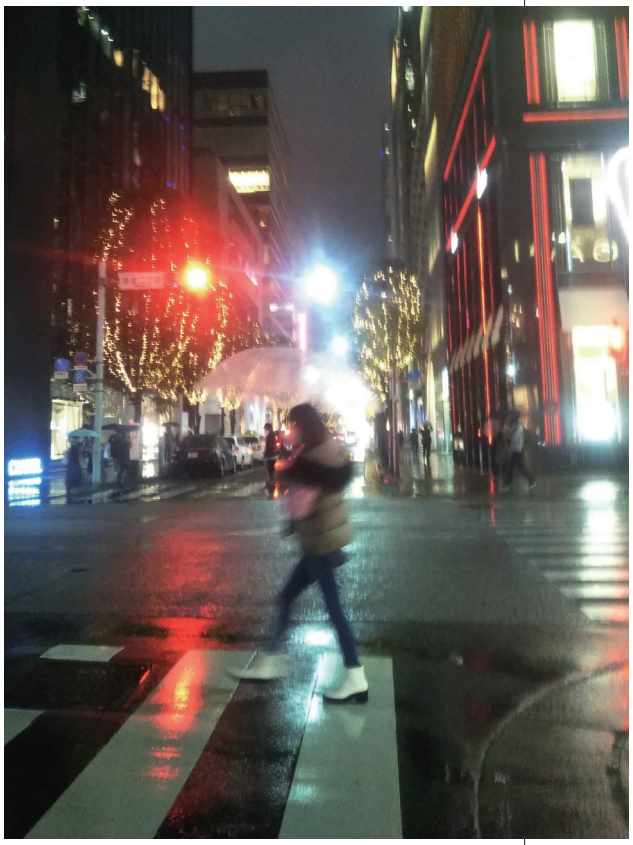
4　**【俳句のタネ】**に似合った**【五音の季語】**を探す。

《季語の選び方のコツ》

・楽しそうな**【俳句のタネ】**ならば、楽しそうな**【五音の季語】**を取り合わせる。
・悲しそうな**【俳句のタネ】**ならば、悲しそうな**【五音の季語】**を取り合わせる。

俳句は実践によって学ぶものですから、理屈を読み嚙るばかりでは前に進めません。まずは一句。最初の一歩を踏み出しましょう。

夏井いつき



第26回

小雨の銀座通り

修司忌の銀座よ雨だけがリアル

花豆

「修司忌」とは、歌人、劇作家である寺山修司が亡くなった日。若い頃には俳句も作っていましたが、句作からは遠ざかっていき、短歌、演劇のみならず様々な表現活動を続け、膨大な文芸作品を発表しました。一九八三年（昭和五十八年）五月四日、四十七歳で死去。

忌日の季語は、季節感が薄いため、他の季語と取り合わせることも多いのですが、この句は「修司忌」以外に季語らしきものはありませんから、彼の亡くなった五月四日を意識して読み解く必要があります。五月四日は、まさに晩春。この「銀座」は、春闌（はるた）けた東京の繁華街であり、この「雨」は行く春の温い雨なのです。

ふと、今日は寺山修司の忌日なのだと気づきます。かつて、修司もこの銀座に遊んだに違いないという思いが過ったのでしょうか。修司の短歌やアングラ演劇の一場面が重なる光景を目にしたのかもしれません。

傘をさし、劇中人物のように立つ私。甘やかな都会の春の頽廃（たいはい）。虚実の隙間に立つ眩暈。いま降っているこの「雨だけがリアル」と呟く作者にとって、寺山修司とは、一体どんな存在であるのか。一句の深読みは、そこから始まっていくかのようです。

●季語――修司忌（しゅうじき）［春・人事］

第26回

小雨の銀座通り

悴みやマネキンの手がいつも綺麗

髙田祥聖

嗚呼、なんと悴む日なんだろうと、両手をこすり合わせているのでしょう。信号待ちする都会の交差点を思わせるのが、中七下五の展開。ショーウインドーの「マネキン」の手は、長く細く美しく「いつも綺麗」で、悴むことはありません。

悴まない人工物との対比を狙う句は様々ありますが、中七下五の呟きが自然で、ストンと心に入ってきた作品です。

●季語――悴（かじか）む［冬・人事］

ピカチュウがぐつたりハロウィンの終電

はんばぁぐ

前半「ピカチュウがぐつたり」で、ゲームやアニメの世界の話かと思わせ、後半「ハロウィンの終電」で場面を切り替える。この技が成功しました。

最近よく「ハロウィン」はもう季語として使っていいんですか？という類の質問を受けるのですが、歳時記に載っている、載っていないの判断ではなく、作者自身が季語としての強い意識をもって使いこなすか否か。問題はそこだと思います。

少なくともこの句は、「ハロウィン」という季語が、主役として立っていて、遊び過ぎてぐったりしている「終電」の様子が、ありありと再生されています。「ピカチュウ」と「ハロウィン」の取り合わせも絶妙。そこにいる人物の年齢、嗜好、はしゃぎぶり等も、伝わってくる選択でした。

●季語――ハロウィン［秋・人事］

クレーンを寒夜の幹として東京

ツナ好

壊されて建てられてを繰り返す都会という人工の生き物。林立するビル街にそびえる巨大な「クレーン」を、「寒夜の幹」と象徴しました。この幹から、様々な枝葉が広がっていく。それが、人工物としての「東京」なのだよ、と。

「として」のような使い方は、一つ間違えると説明的になりますが、この句の場合は「東京」と下五を名詞止めにし、着地の切れによって説明臭を払拭しています。この判断も褒めたいですね。

●季語――寒夜（かんや）［冬・時候］

タクシーをカトレア降りてくる銀座

深山むらさき

今回、タクシーを降りてくる人を描いた句も沢山ありましたが、「カトレア降りてくる」と思い切った処理をしたことが成功しました。

タクシーのドアが開き、大きな「カトレア」の花束が出現する。どんな人がその花束を抱いているのかは、一切語らないことで、逆に季語の現場を鮮やかに立ちあげました。

「カトレア」を人物の比喩だと読む人も当然でてきますが、季語は「カトレア」以外にありませんから、人物を想像するとしても、その手には「カトレア」の花束があると読むのが妥当。いかにも「銀座」らしい「タクシー」であり、「カトレア」であります。

●季語――カトレア［冬・植物］

秋風や今朝は子犬のゐた木箱

清水縞午

今朝の通勤時、「子犬」が入っている「木箱」が目に入り、気にはなっていたのでしょう。帰りに見てみると、子犬のいない木箱だけが残されています。誰かが拾ってくれたのか、はたまたお腹のすいた子犬が木箱を乗り越えて歩き出してしまったか。

段ボールではなく「木箱」であることに、捨てた人の思いも滲み、「秋風」と空っぽの「木箱」の取り合わせに、作者の心も感じ取れます。

●季語――秋風（あきかぜ）［秋・天文］

夜廻やムエタイジムの灯の猛し

伊藤映雪

「夜廻」は「火の番」の傍題。「ムエタイ」とは、主にタイで行なわれている格闘技「タイ式ボクシング」のことです。

火の番の「夜廻」をしていると、ムエタイのジムには煌々と灯りがともっているのです。聞こえてくる激しい音や気迫のこもった声。ジムの「灯」を「猛し」と感じとったところに、詩も生まれました。

●季語――夜廻（よまわり）［冬・人事］

・会員番号順に掲載しています。
・添削した形で句を掲載する場合があります。
・投句された回で記載しています。

第26回　小雨の銀座通り

夜は海底なる交差点冬が来て　登りびと
遠浅のやうな銀座の冬を来よ　ぼへみあん
子の髪の夜空のにほひ冬深し　ぼへみあん
マネキンの毛皮ひと撫でさて同伴　佐藤儒艮
雨の夜の銀座を枯野にほひけり　黒子
クリスマス一人銀座で買う絵筆　信壽
ふたりなら入れる店よ寒灯下　ゆすらご
活版の名刺の匂い冬に入る　葉山さくら
職安やあの風呂吹が食べとうて　奈良の真
ＳＣＥＮＥ10彼女に冬の雨しとど　信茶
秋の灯や銀座の父を捜す路地　空木花風
花火の夜レジの日本語辿々し　やまだ童子
牡馬の名をラジオが叫ぶ師走かな　那須のお漬物
再会は癌センターの冬の暮　那須のお漬物
雪しまく赤いあかりのピアノバーつづきのんき
冴ゆる路地にマイケルジャクソンは居る　背番号7
エスカレーター真ん中に立ち着ぶくれる　背番号7
東京や聖樹ひかりて影持たず　小池令香
この街は水槽みたい初しぐれ　直
信号の赤に芯あり冬の雨　海峯企鵝
火恋し階段地下へ談志の忌　吉野川
灯の滲む銀座の聖夜更けにけり　大橋あずき
鍋焼や饐えた孤独をわかちあう　蝦夷野ごうがしゃ
不夜城にみづの香満ちて秋黴雨　クラウド坂の上
秋雨や画廊に硬き椅子二脚　クラウド坂の上
見回りの先生からのホットレモンしみずこころ
万惣のパーラー有りし日や檸檬　城ヶ崎文椛
夕時雨本社移転という噂　城ヶ崎文椛
撫でつける後れ毛寒し夜の銀座　おぐら徳
爆買いの紙袋しぐるる銀座　おぐら徳
残る月カラスに倒れたる空き瓶　高橋寅次
ＵＦＯの来さうな遺跡冬銀河　円堂実花
我鬼と名乗りて凩を行く猫背　円堂実花
時雨るるや啼かなくなった鳩時計　ピアニシモ
芯抜いた林檎を焦がすバターの香　打楽器
着信のランプ師走の雨を駆く　古瀬まさあき
源氏名に雨を入れましょ小夜時雨　抹茶子
美術展はしごし厚切りパンがぶり　ぶるうと
銀バリのプラムジュースよ霧の灯よ　稲垣加代子
水たまりのネオン蹴散らす十二月　ペトロア
コンビニの犇めく銀座おでん買う　西村小市
此処からはシゴト時雨を夜会巻き　江藤すをん
しぐるるや駅番号はＧ〇九　びんごおもて
「月光荘ピンク」のショール振り向かぬ　小倉あんこ
信号を待ってドラマのように雪　けーい〇
地下鉄の風やコートは雨の匂い　まあぶる
秋霖が銀座を銀座らしくする　ありあり
同窓会の武装仕上げはこのコート　みー
冬ぬくし銀座画廊の四坪半　はれまふよう
休日の社窓の灯秋時雨　小福　花
星冴ゆる日比谷野音の無名歌手　あすかきょうか
行く秋の銀座に開く傘の色　春来　燕
カルティエの前の邂逅初時雨　あみま
社員証かへす裏口冬夕焼　渡邉　俊
骨箱帰宅す冬の猫が見てゐる　うからうから
クリスマスカクタス亡父立つネオン　星埜徹円
試着室狭しや手套脱ぎ落とす　ふるてい
襟に供香微か冬めくＡ５口　大西どもは
渋滞の聖夜をあらう銀の雨　うに子
雨傘の隙間の空や菊供養　砂楽梨
銀座駅出れば鐘の音梅雨晴るる　井納蒼求
寒夜のジョギング水溜りのネオン　義勇和爾丸
宿探す夜半や焼鳥咥えつつ　Ｑ＆Ａ
クリスマス前夜和光の時計台　小鞠
ドッペルゲンガー追ひかけど消ゆ小夜しぐれ　小鞠
風邪の子のもとへ銀座を脱ぎ捨つる　る・こんと
外套や雨に跳ねたる銀座の灯　る・こんと

・会員番号順に掲載しています。
・添削した形で句を掲載する場合があります。
・投句された回で記載しています。

しぐるるにまかせ銀座の夜を猫背　みづちみわ
秋の雨ぎんざ託児所レトロビル　広島　しずか80歳
金曜の眠らぬ街の灯に霙　柊まち
雪傘のふたつになりて右ひだり　飯村祐知子
小走りに路地を真砂女か小夜時雨　飯村祐知子
客引きのジョーの白シャツ海匂ふ　みずな
ヤッケが傘でした映画の真似をして　七瀬ゆきこ
銀座冬パーラーといふおもてなし　七瀬ゆきこ
ブルガリは捨てる銀座は冬の雨　にゃん
嬌声のドアを閉づれば雪の街　竹田むべ
未達成のノルマ時雨の歌舞伎町　竹田むべ
裸木の空を抱えて潔し　とわずがたり
秋ついり東銀座の親子丼　神保一二三
ラテアートへ砂糖を入れてゆく時雨　神保一二三
名画座の闇に逃げこむ霙の夜　彩汀
しぐるるや東京の空真つ四角　彩汀
冴ゆる夜の決意帰る帰る帰る　新井ハニワ
冬の雨振子は不規則に震ひちかひか改め西野誓光
画材屋のホルン紫煙のレノンの忌　小山美珠
しろがねの時雨のしじま銀座の湯　トウ甘藻
聖夜の行列銀座のペコバッグ　トウ甘藻
室生寺の石段高し木の葉雨　堀尾みほ
もがりぶえ田舎銀座の短さよ　花屋英利
白ブーツ猩々木に屈みけり　泉楽人
一葉落つ銀座三越裏通り　風花まゆみ
今日までの聖樹に遠慮気味の雨　大和田美信

底冷のネオンに消へてゆく仕事　大和田美信
チイママと呼べばみぞるる銀座の夜　大久保加州
秋霖やバーテンダーの嘘やさし　玉響雷子
時雨るるや金春湯からまたひとり　玉響雷子
鐘冴ゆる午後の銀座のセルフそば　ノアノア
誰も吾を知らぬ雑踏冬ぬくし　板柿せっか
故郷は東京ビル街は凍雨　まちゃみ
失恋やずんずん歩く秋の夜　小笹いのり
凩のハイヒール銀座ワシントン　山羊座の千賀子
ピッコロも買ったし冬の帽子だし　ひつじ
また若い頃の話や雨の月　新田峻真
鬱病を隠さぬ君と風花を　磐田小
物証を消して聖夜の雨しとど　誉茂子
二度咲やこの部屋きつと事故物件　へなけん
一万のバイトは銀座クリスマス　平井伸明
マティーニ苦し外套の老紳士　池之端モルト
風冴ゆる銀座0時の無味無臭　百瀬はな
秋時雨鳩居堂には寄らないと　飛来　英
しぐるるや開演までに間にあふかでんでん琴女
産院へ急ぐ新宿小夜時雨　岡本かも女
煉瓦亭の蒸気冬至のオムライス　大西みんこ
大根の飴色やさし路地は雨　小川さゆみ
かなめ屋のかんざし選りて時雨虹　小川さゆみ
街の灯を蝕めいて過ぐ初時雨　仁和田　永
ワイパーの慰撫する街や初時雨　仁和田　永
札束と同じだ冬の桃硬い　いかちゃん

冬景色サイレンを樹は遮れず　いかちゃん
父見舞う真鱈白子をゆるり煮て　東田　一鮎
出張の友と聖夜のガード下　伊藤　恵美
始末書の窓を聖樹の灯の滲む　深山むらさき
あんぱんの臍は薔薇色日記買ふ　東山すいか
満員の「せんべろ」へ雪混じる雨　あまぐり
真砂女忌の柳しなやか画廊出づ　このみ杏仁
懐炉握るこぶし夜雨の匂ひ立つ　木ぼこやしき
しぐれては膨らむ信号機の光　三浦にゃじろう
銀座鮨どころへ真夜の時雨傘　池内ときこ
同伴の銀座が斯くも時雨れては　山本先生
木の葉髪父のお召は御用達　らねじ
ブロッコリ吾に逆らわぬセルフレジ　あなぐまはる
時雨るるやビル濡れてゐて俺もそう　向原てつ
接待のお辞儀重たし冬の雨　平本魚水
ワイパーの速さ冬夜のラジオ消し　宇野翔月
雨月って都心のビルに映るんだ　楽花生
銀座は氷雨ネットニュースの冒頭に　つんちゃん
床屋行くだけの余所着や寒の雨　原　唯之介
おでん屋もステルス値上げ竹輪喰ふ　栗の坊楚材
夜勤明けの保育士寒鴉に懐かるる　栗の坊楚材
雨に独りそうだ聖樹を見て帰ろ　かのこゆり
一行に終わる容態冬の雨　末永真唯
冬薔薇の蕾を愛でて夜の人　片野瑞木
冬の雨明るし茶葉はダージリン　片野瑞木
冬の雨小脇のビッグイシュー重し　丹波らる

会える日の翼のような白ブーツ　うっとりめいちゃん
インバネス着るマネキンの硝子の目　海野あを
靴音はフォルテ銀座の冬の雨　ゆりかもめ
ものの音消えて竦まる秋の雨　渡辺鬼
秋の灯や少女は水溜まりを避けない　王朋亡
二次会とせむ往来の凍星を　ツナ好
灯と人の混ざる残像冬の街　田中木江
聖夜のダイヤモンド炭素つて言うな　シュリ
仕立屋の呼鈴しゃらん冬薔薇　緒方朋子
老刀自の静かな恋や冬近し　紅緒
店先のだるまストーブ尾久銀座　伊藤節子
ドアマンの時計一瞥小夜時雨　みのん
白菊や喪主終へし夜のジンライム　ま猿
日記買ふ母のゐさうな交差点　野村起葉
行く秋を集めて雨は暗渠へと　夏椿咲く
しぐるるやシャッター街の名は銀座　咲弥あさ奏
冬初め空也最中の皮の色　絵十
消防のサイレンに揺る月見草　まがりしっぽ
砲弾のビルへ心へレノンの忌　能瀬野風
月の雨銀座に在りし真砂女の灯　沙魚　とと
積読を謳ひ小春の神保町　あずお玲子
レイトショー終へて聖夜の風を吸ふ　ちょきさん
すれ違ふエレベーターや月の雨　超凡
延長保育お迎えのホットレモン　千代之人
準夜勤明けの家路の返り花　千代之人
盛り塩の溶けしクラブの冬薔薇　一石渓流

天王星食の静けさ冬は来ぬ　中岡秀次
濁り酒雨止むことを淋しがる　里すみか
着膨れて今更君に遭う街よ　きみどり
去年今年ママと銀座の廻る寿司　あさのとびら
泥つきの葱はこじやれてアンテナショップ　白祐
初時雨教文館の古階段　さかたちえこ
面接のビルの眩しき秋の蝉　くう
鳩居堂しぐれ詩人の集う夜　とまや
実印を夜の銀座の初時雨　滝澤朱夏
放られたごとき高さをかりんの実　おかげでさんぽ
夜勤明け午前零時のクリスマス　みのわっこ
タープ張る冬月の野の雨蒼き　陣十　大
雲海に新しき村立ちにけり　リコピン
デパートの影ほの青く冬に入る　加藤ゆめこ
キャバ嬢も旅人もゐる初湯かな　加藤ゆめこ
天かすの余熱遠火事のサイレン　濃厚エッグタルト
狐火の電飾に匿われけり　濃厚エッグタルト
秋霖や銀座に杖の専門店　小米
顔見世や空也もなかの持ち重り　浅海あさり
日記買ふito-ya窓を傘の波　浅海あさり
しぐるるや路地裏にある小鳥店　七朝まるよ
時雨忌や銀座の書肆にでも行くか　喜多丘一路
押入れの銀座のふくろ十二月　村瀬っち
御堂筋北へファミチキ喰って夜学　むい美縁
星冴ゆる十五回目のオーディション　なみこまち
極月の車両三台炎上す　なみこまち

MIKIMOTOのツリーを独り撮る寒夜　彼理
時雨傘待ち合わせまであと五分　ルージュ
軒借りて手拭ひ買ひて初時雨　陽光樹
9階に灯り一つの聖夜かな　風輝
面影の潤むガス灯花の雨　来冬邦子
春暁の牛丼銀座三丁目　みなし栗
銀座という素敵な街なにもない冬　永華
日短し対角線にある花屋　永華
向かひ合ふ紅茶冷めゆく十二月　駒村タクト
手袋のままに牛丼かきこめり　駒村タクト
冬曇の銀座巨人のパレード来　田畑　整
歌舞伎座の灯りに雪と二十歳の吾　春海　凌
残業の夜や着ぶくれて人の顔　牧野冴
芳名帳白し初個展の秋雨　林としまる
母まだか寒夜の駅の僕とコロ　いくたドロップ
モルモット値下げしました冬の雨　千暁
焚火静かやまひに心はわたさない　山内彩月
こち亀の揃わぬ床屋おけら鳴く　虎八花乙
凍蝶やあまりにきれいな平手打ち　虎八花乙
てぬぐいの干支や時雨るゝ金春湯　伊予素数
解熱剤効いた子そういえば聖夜　十月小萩
マフラーの巻き方きれい銀座線　梅野めい
椎茸を刻む山雨のにほひする　梅野めい
駅前の銀座通りに空つ風　しろぴー
マロニエの花君を待つ時が好き　しろぴー
夜半の雪津軽に遠きBarLupin　ゆうじい

◆大賞

リビング部門

骨壷と並んで相撲見る炬燵　小川野雪兎

◆最優秀賞

台所部門　乳あたへて頭からつぽのバナナ　島田雪灯

寝室部門　どんな夜も電気毛布が待っている　月野うさぎ

玄関部門　お札貼った柊挿した塩盛った　吉野川

風呂部門　家事代行おおと洩らせる黴の風呂　山本先生

トイレ部門　冬帝が先に便座に座ってる　阿部八富利

◆優秀賞

リビング部門

春の猫写真の父を倒すなり　海野ちきまる

正露丸が匂わないほどに寒い　けーい〇

愛の日のバランスボールにつきゆびす　麦のパパ

勧誘の電話は叩き斬って冬　安田伝助

台所部門

お米てかてか杓文字に春のひかりかな　里山子

泡の手で窓がらりここからも虹　ざぼん子

息止めてもろこし切るや家族欲し　髙田祥聖

除雪機の遠吠え胡桃パン焼く夜　立田鯊夢

寝室部門

咳止のシロップ寝間に漏れ来る灯　菜活

脇腹にウルトラマンの刺さる蚊帳　片野瑞木

3秒でねれる星月夜のボタン　いといと6才

タミフルはにがい布団はいじらしい　横縞

玄関部門

身に入むや革靴の皺まで父似　いかちゃん

玄関に燕子宮に第一子　紅紫あやめ

かくれんぼの最中麦茶飲みに来る　ぞんぬ

うららかなチャイムウクレレ届いたか　立町力二

風呂部門

囀りや点字テープを貼るリンス　末永真唯

ふぁしゃふぁしゃと婆さんの髪洗いけり　コンフィ

首振れず風呂場へ左遷扇風機　丹波らる

団欒はくたびれる風呂洗う除夜　謙久

トイレ部門

龍天に登り身体の栓抜ける　青井えのこ

たたなはる便器の奥の黴の国　葦屋蛙城

スイートピー月の障りのビデは弱　渥美こぶこ

短日のトイレ知将の根城めく　亘航希